

聖学院大学総合研究所〈児童〉における「総合人間学の試み」研究会・児童学科共催
 2018年度第1回〈児童〉における「総合人間学の試み」研究会
 発表者：井上知洋 「家庭の読み書き環境と子どもの読み書き発達
 ——カナダ、中国、日本の縦断研究から」



発表者：井上知洋先生

2018年9月19日（水）、4号館4階第二会議室において、日頃から子どもの読み書きの発達と障害に関する認知的要因、社会的要因、言語学的要因について先進的な研究に取り組まれておられる人文学部児童学科助教の井上知洋先生によって以下の発表が行われた。

1. 研究における関心の所在

冒頭、研究における関心の所在についての説明があった。

現代の日本社会において、私たちは文字の読み書きを前提とした社会に生活している。その意味で、学齢期の子どもにとって読み書きの習得は非常に重要な発達課題の一つといえる。子どもの読み書き能力に影響を与える要因といった場合、子ども自身に起因する要因（例えば、ことばを聞き取る力、聞いたことを記憶する力（聴覚的な短期記憶）、見たものを素早く音に変える力、動機づけ、文字の形を覚える力、知っていることばの数）や、家庭環境の要因（蔵書数、読み聞かせ、直接的教育、童謡、ことば遊び）があげられているが、今回の研究では、子どもの読み書きの発達と、家庭の環境や活動の間にどのような関係があるか、具体的には家庭の読み書き環境の内、どの側面がどのようなプロセスを経て子どもの読み書きに影響する

かを明らかにした。

2. 研究方法

研究方法は、カナダ人の子どもとその保護者、中国人の子どもとその保護者、日本人の子どもとその保護者を対象とし、一定期間にわたり同じ個人を追跡して家庭の読み書き環境と子どもの読み書き発達に関するアンケート調査を行い（縦断研究を実施）、これらの調査結果を交差遅延モデル法で分析し、【仮説1】「家庭環境がこどもの読み書きに影響する」（（例1）「親による直接的教育が多いほど、子どもは読み書きが得意になる。」（例2）「読み合いが多いほど子どもは語彙が豊富になる。」等）、【仮説2】「子どもの読み書きが家庭環境に影響する。」（（例1）「子どもが読み書きが得意なほど（親は）よく教えるようになる。」（例2）「子どもが読み書きが苦手なほど（親は）よく教えるようになる。」等）について検証を行った。

アンケート調査における具体的な調査項目は以下の通りである。

1) カナダでの縦断研究における調査項目

（家庭に関する調査項目）

・ 幼稚園時の家庭の読み書き環境

①直接的教育 (direct teaching / formal Home Literacy Environment)

②読み聞かせ (shared reading / informal Home Literacy Environment)

・ 親の社会経済的状況 (Socio Economic Status) (子どもに関する調査項目)

幼稚園時：読み書きの基礎となる力⇒小学校1年生時：文字を読む力⇒小学校2、3年生時：文章読解力

2) 中国での縦断研究における調査項目

（家庭に関する調査項目）

・ 幼稚園時の家庭の読み書き環境

①直接的教育 (direct teaching / formal Home Literacy Environment)

②読み聞かせ (shared reading / informal Home Literacy Environment)

- ・親の社会経済的状況 (Socio Economic Status)
- ・家庭にある蔵書数
- ・親の子どもへの学力への期待 (【例】問. 「来年 (1年生の時)、おさんはどのくらい上手に読むことができますと思われるか。」、問. 「来年 (1年生の時)、おさんはどのくらい上手に書くことができますと思われるか。」)

(子どもに関する調査項目)

幼稚園時：読み書きの基礎となる力⇒小学校1年生序盤：文字を読む力⇒小学校1年生中盤：文章読解力

3) 日本での縦断研究における調査項目

(家庭に関する調査項目)

- ・幼稚園時の家庭の読み書き環境
 - ①直接的教育 (direct teaching / formal Home Literacy Environment)
 - ②読み聞かせ (shared reading / informal Home Literacy Environment)
- ・小学校2年生時の家庭の読み書き環境
 - ①直接的教育 (direct teaching / formal Home Literacy Environment)
 - ②読み聞かせ (shared reading / informal Home Literacy Environment)

(子どもに関する調査項目)

小学校1年生時：ひらがなの読み書き能力⇒小学校2年生時：漢字の読み書き能力

3. 結果

カナダ、中国、日本の縦断研究からは、親による直接的教育が子どもの基礎的な読み書き能力に、読み聞かせは長期的には子どもの読解力にそれぞれ関連していることが明らかになった。また、カナダ、中国での研究からは家庭の環境や活動は、子どもの基礎的な力への影響を介して後の読解力に影響することが確認された。

しかし、これらの結果が得られる一方で「子どもたちはあくまで『影響を受ける』側に過ぎない

のか」、「子どもたちも環境に『影響を与える』のではないか」との疑問が生じ、日本での縦断研究においてこのことを検証した。

その結果、「子どもが読み書きが得意な時、保護者は直接的教育の関与を減らす」、「子どもが読み書きが苦手な時、保護者はより多く関与をするようになる」というように、子どもの読み書きの力がその後の親による直接的教育の頻度を「調整する」要因となっていることも明らかになった。

本研究における統計分析の結果は、あくまで集団内の個人差 (ばらつき) に関する結果であることを前提とするが、本研究を通して、家庭の読書環境と子どもの読み書きは相互に影響し合う関係にあることが証明されたとの結論が得られた。

今回の発表に対して、今日の日本の研究環境では親の社会経済的状況や家庭内の文化環境などを調査項目として加えることはできないとの意見や、海外での研究を通じてこれらの変数と子どもの読み書き能力との関連についての考察は貴重な知見であるとの意見が提出された。

また、教員としての経験がある参加者からは、実際の教育現場で経験的に感じ取ってきた事柄が、今回の研究発表を通じて科学的な裏付けをもって明らかにされたように思うとの感想が述べられた。さらに、格差社会といわれる日本社会の中で、家庭の読み書き環境が良好とはいえない子どもたちに、どのような支援をすることで彼らの読み書き能力の向上が期待できるのかという課題に関する研究も今後は是非行ってもらいたいとの意見も寄せられた。

最後に、井上先生より本研究の知見が家庭の環境や活動が子どもの育ちにとっての支えとなることを、また養育者や教育研究者の日々の営みの一助となることを願っているとの言葉が添えられ研究会は閉会となった。

(文責：小池茂子 [こいけ・しげこ] 聖学院大学人文学部児童学科教授)